

Galen Strawson,
The Evident Connexion: Hume on
Personal Identity
(Oxford University Press, 2011, 165p.)

岡村太郎

ギャレン・ストローソンは、現代形而上学や心の哲学などで著名な哲学者である。ヒューム研究においては、*The Secret Connexion: Causation, Realism, and David Hume*(1989)にてヒュームを实在論者として読もうと試みる、「ニュー・ヒューム」なる解釈を提示する一派の代表的人物である。

本書においては、ストローソンの「懐疑的实在論」解釈が『人間本性論』の人格論にも適用される。基本的にはこの解釈をもとにして、従来のいわゆる「知覚の束」説の理解に訂正を迫り、またヒューム人格論で最大の争点となっている『本性論』付録でヒュームが吐露した「迷宮」の問題に、一つの解答を与えている。本書は全三部からなり、ストローソンによればそれぞれは他に依存しておらず、独立して読める。以下では、三部それぞれを概観したのち、評者のコメントを加える。

第一部では、彼の「懐疑的实在論」解釈が素描される。伝統的に、ヒュームの経験論は、「経験が实在する存在の全てである」といった形而上学的主張をしていると解さ

れることが多かった。それによればヒュームの主張は次のようなものである。「経験は、ある対象（因果や外的対象、心など）について知ることのできる全てである」という認識論的主張から、「経験はその概念によって意味することができる全てである」という意味論的主張が引き出され、さらにここから「経験はその対象がそれであるところの全てである」という存在論的主張が導かれる。これを基本線として、自己は経験に尽きるものであり、外的対象はある類似性、恒常性、整合性を伴った経験に尽きるものであり、因果は規則的継起に尽きるものであるとヒュームは主張しているとされるのである。

ストローソンはこういった解釈に抗って、ヒュームはそれらの対象が経験に尽きると考えるような「独断的形而上学者」ではないと主張する。ヒュームは、対象の本性を十全には知ることができないとする懐疑論者であり、経験を超える知られないものの存在を認める「懐疑的实在論者」なのである。ヒュームの観念説は、対象の全てを尽くそうという議論ではなくて、それらについてどれだけのものが経験的に基礎づけられ（すなわち印象から由来し）、われわれが知ることができ、哲学において使用するのに適切なのかを探るものなのである。以上のことは、ヒュームの「思い浮かべること (conception)」と「想定 (supposition)」といった用語法の区別に着目することによ

って理解できる。印象に由来し明晰に思い浮かべることができ、哲学において使用できるという規範的な意味の込められた「思い浮かべること」の他に、哲学において使用されることは認められないがわれわれが自然にそうするという点において有意味であると認められる「想定」という分類がヒュームには用意されており、経験を超える知られないものは認められているのである。

第二部において、ストローソンは「知覚の束」説の従来の解釈に訂正を迫る。第一部でも述べられるように、伝統的にヒュームは存在論的に自己が経験に尽きるものであり、ある種の「無主体論」を主張していたと解されてきたが、それは誤りである。知覚すなわち経験とは「経験すること」であり、経験の主体を含意している。ヒュームはこの「経験は経験者を伴う」という必然性を否定するような独断的形而上学者ではない。心が知覚の束であるというヒュームの主張は、認識論的観点からのものであって、つまりその概念を哲学的に使用するのに適切なものかを判定するものであって、心は知覚の束に尽きるという存在論的主張がされているわけではないのである。因果、外的対象と同様に、われわれが知ることができる限りにおいては、心は経験の集まりであるが、経験に伴う自己、主体の存在は認められている。

ストローソンによれば、このことはヒュー

ムのテキストを注意深く読めば明らかである。まず「心の本質は知られない」(T intro 8)とするヒューム自身の記述は、心は経験の集まりに尽きるものでないと考えられていることを示している。また、ヒュームが人格論において何を攻撃しているのかを注意深く見ることによっても理解できる。ヒュームが批判しているのは、現在の経験の主体の存在ではなくて、複数の経験にわたって同一性をもった主体の存在であって、現在の経験とそれに伴う主体の存在は疑われていない。また、ヒューム自身が「心は能力を授かっている」としているように、ヒューム哲学は心有能力である「想像力(imagination)」に大きく依存している。この能力を持った心というのは、経験の集まり以上のものであるから、ヒュームは存在論的な束説を唱えているわけではないと考えられるのである。

さらにストローソンは、「私が私自身と呼ぶもののうちに最も親密に分け入るとき、私は常にある個別的な知覚に突き当たる・・・私は知覚なしに私自身を捉えることはできないし、知覚の他には何も観察することができない」(T 1.4.6.3)という、ヒュームの人格論の有名な一節を検討することで、自身の解釈を深化させる。ここでヒュームが意味しているのは、自己が存在しないということではなく、経験と独立の「むき出しの(bare)」自己などというものはないということであって、自己が存在しない

とは言われていない。

それゆえ、自己はどこにあるのかというと、経験と共にある。「私自身に深く分け入る」という内観の際に、あくまで経験しか得られるものはないのだが、その経験の中に自己は含まれている。経験には、その経験内容のみが含まれているのではなく、経験の主体も含まれているのである。従来の解釈は、経験は経験内容に尽きると考えていたために、「経験の他には何も観察することができない」というヒュームの記述を、主体の存在の否定のように解釈してしまってきたのだ。

自己が経験とは独立に把握できないものであるならば、主体への「気づき (awareness)」はどのように説明されるのか、と言われるかもしれない。しかし、こうした指摘は、「気づき」を「経験とは独立した注意の対象」と考えてしまっており、これを受け入れる必要はない。経験は「経験すること」なのだから、ヒュームの「自己精査」の場合に典型的なように、経験を十全に把握するとき、経験の主体は注意の対象になるのである。

第三部においては、ヒューム人格論解釈の最大の論争点となっている、ヒュームが『本性論』付録で自らの論に述べた「迷宮」について、ストローソン自身の解釈が提示されている。ヒュームは「付録」において、「想像力の作用に基づいた、経験的に根拠づけられた自己の観念」の説明が「上手く

いっている (promising)」と述べるが、「われわれの諸知覚を思考において結び付けている結合原理」の説明になると、「望みは消え去ってしまう」と述べる (T App 20)。

具体的には、「別個な知覚は別個な存在である」という原理と「心は異なる存在の間に実在的結合を決して知覚しない」という原理を無矛盾にすることができない、とヒュームは言う (T App 21)。しかしこれらの前提だけではまだ矛盾が出てこないのがあって、隠れた第三の前提を特定するのが注釈者達の仕事となってきた。ストローソンは、この隠れた第三の前提は、「ヒューム哲学が知覚間の実在的な結合原理に根本的にコミットしている」ことであると解釈する。これによって矛盾が生じ、この解消のためにはヒューム自身が述べる通り「知覚が単純で個別的なものに内属している」か「知覚は別個な存在で、心がその間に実在的結合を知覚する」必要があるが(*ibid.*)、これは経験的に認められず、ヒューム哲学において許容できない選択肢である。この実在性は、ヒュームの哲学が根本的に依存しているものであり、「知られない」ものではすまされない。このように、ヒュームの哲学は、その経験論的原理が許容できない原理にコミットしていたのであり、「望みが消え去る」に至るのである。

ストローソンは以上の主張を以下のように展開する。ヒュームは「理論上の原理」とは別に「実在する結合原理」を区別して

おり、心の働きを統制する、「永続的 (permanent)」で「抵抗不可能 (irresistible)」な「想像力原理」は、実在するものとして扱われている。この「結合原理」を細かくいうと、「近接 (continuity)」、「類似 (resemblance)」、「因果」、外的対象などを想定する「実在的に持続し存在する観念を指定する原理」といった観念連合原理となる。ヒュームはこの実在的原理を彼の哲学の至る所で使用している。たとえば「それらの間にある結合の結びつきがなければ、同じ単純観念が同じ複雑観念へと規則的に落ち着くのは不可能」(T 1.1.4.1)などという記述はその典型である。

この「実在的な結合」という現象と「想像力によって生みだされる結合」という現象は混同されてはならない。想像力によって産みだされる結合（外的対象、因果的必然性、自己の持続）は、実在的な「想像力原理」の結果として信じられるようになるものだからである。想像力の「実在的な結合」という原理を実在的な「想像力原理」によって説明しようと試みることは、「論理の妥当性を論理によって証明する」ようなものであり、その想像力の実在的な結合は、「想像力によって生みだされる結合」とは根本的に異なるのである。この形而上学的な実在的な結合にヒューム哲学は全面的に依存しているという反論を予期し、ヒュームの望みは消え去ったとストローソンは解釈する。

以上、全三部を概観してきた。ストローソンの主張は明快であり、強力で統一的なヒューム解釈が打ち出されていて、ヒューム哲学、ヒューム人格同一性論を学ぶものにとってこの著作は有益なものであるように思われる。ただ、その主張がヒューム人格論解釈として完全な説得力と正当性をもつとは直ちに言えないように思われる。

まず、ストローソン自身関係がないとは言ってはいるものの、彼的人格論解釈は「懐疑的実在論」解釈に依っているところが大きいように思われる。この「懐疑的実在論」は、ある対象について「知られない」というヒュームの記述からヒュームはその対象の実在性を認めているとするものであるが、「知られない」ということから「実在する」と結論してよいかは疑問である。ストローソンの主張を受け入れるためには、この「懐疑的実在論」解釈の正当性をより批判的に検討しなければならないであろう。

また、ヒュームは『本性論』一巻のみならず二巻でも人格論を展開しているが、ストローソンはほぼ前者にのみ着目している点、不備があるのではないと思われる。現に、彼は第二部において自己への「気づき」「注意」の問題に苦心しているが、それらのトピックは『本性論』二巻で明示的に語られているトピックであり、二巻の人格論に着目していれば、よりよくそれらの問題に答えられ、包括的なヒューム人格論解釈を提示できたように思われる。